
ビター・チョコレート 一年生たちのバレンタイン

奇天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビター・チョコレート 一年生たちのバレンタイン

【Nコード】

N3281F

【作者名】

奇天

【あらすじ】

バレンタインイベントで盛り上がるリリアン女学園。女の子の特別な一日をめぐって、一年生たちの想いはそれぞれだけれど、みんな最高の思い出を作るために精一杯過ごしていた。

（前書き）

『クリスマスクロス』から『あなたを探しに』までが舞台でネタバレを含みます。

ビター・チョコレート

一年生たちのバレンタイン

それは女の子にとって特別な一日。ありったけの気持ちを想いを込めて包み込んで最愛の人へ届ける儀式。

聖バレンタインデー。

リリアン女学園の生徒たちにはさらに素敵なイベントが用意されている。待ち焦がれていた日を目前に、初体験となる一年生たちはちよつぱり右往左往。その日をどう過ごすかは人生の一大事ってくらいみんな真剣に思っているから。

1

「ちよつとよろしいかしら」

休み時間。乃梨子はクラスメイトたちから呼び止められた。慌しい毎日ではあるが、休み時間すべてが忙しいわけではない。だから、つい頷いてしまった。

彼女たちの顔を見てから乃梨子は後悔した。声を掛けただけなのに、どの顔も意を決したような表情を浮かべていた。思えば、普段の声の調子と違ったのだから頷く前に気づくべきだった。

わざわざこうして呼び止めたということは、ただの雑談ではないだろう。乃梨子に、あるいは白薔薇のつぼみへの質問やお願いであることが、これまでの間もなく一年となるリリアン女学園での体験

から分かっていた。そして、その質問やお願いは乃梨子にとってやっかいなことが多いことも。

とはいえ、いったん頷いてしまった以上むげに断るわけにもいなか。い。気持ちを切り替え、志摩子さんを見習ってにっこり笑って対応することにした。

「何かしら」

クラスメイトは三人。最初に声を掛けた真ん中の子が言った。

「私たち、乃梨子さんをお願いしたいことが」

首をかしげてみせると、彼女が説明しだした。

「実は、バレンタインデーに紅薔薇のつぼみにチョコレートをお渡ししたいのだけれど、受け取ってくださるかしら、と私たちお話しています」

その言葉にあとの二人が続く。

「バレンタインデーといったら、宝探しのイベントでお忙しいでしょうし……」

「お噂では、紅薔薇さまはチョコレートをお受けにならないと聞きましたし……」

乃梨子は少し驚いた。たしかにバレンタインデーが間近に迫っているからタイムリーな話題ではある。しかし、白薔薇さまの話ならともかく、祐巳さまのことは管轄外だろう。

「それで、私にお願いとは？」

三人は祈るように両手を前で合わせて乃梨子を見上げるように見つめた。

「もしよろしければ、紅薔薇のつぼみに伺ってくださらないかしら」
「なんと図々しいようなお願いに聞こえる。乃梨子は右手で髪をかき上げ、そのまま視線を宙にさまよわせた。

「だって、薔薇の館にいらっしゃる一年生は乃梨子さんだけなんですもの」

うーん……。

思わず唸ってしまふ。

自分たちで祐巳さまご本人に尋ねるのが筋というものだ。でも、普通の一年生にそれを求めるのは酷というものだろう。そもそも、そんなことができるならはじめから堂々とチョコレートを渡すだろう。

他に適任がない以上、乃梨子にこの話をするのも理解はできるでも。

教室を見渡すと、視線は本を読んでいる友のところで止まった。瞳子が祐巳さまにチョコレートを渡すとは考えにくい。また、クラスメイトたちが無邪気に祐巳さまにチョコレートを渡したからといって動揺したりはしないだろう。けれども、心の中まで平然としていられるだろうか。

「ごめんなさい」

断る理由を思いつく前に口から出てしまった。

別に乃梨子が彼女たちのお願いを聞かなかったからといって、祐巳さまがチョコレートをもらわないことにはならないだろう。それでも片棒を担ぐようなことはしたくなかった。

普段の乃梨子からはほど遠い冴えない説明でクラスメイトたちを納得させるのに休み時間をまるまる使ってしまったが、むしろすっきりした気持ちだった。

2

中等部にいたころ高等部になれば素敵なバレンタインデーを過ごせると単純に思っていた。でも、それはお姉さまがいてこそと気づいてしまった。

クラブ活動などで上級生と接する機会がないときっかけがない。普段はほとんど感じないけれど、こうしたイベントの時には姉のいる同級生を羨ましく思った。

そんな美香にも憧れの人はいる。

紅薔薇のつばみ。

ちょっと近寄りがたさを感じる山百合会の幹部の中で、親しみやすさを漂わせている祐巳さまは多くの一年生に慕われている存在だ。見た目も特別な他の方々とは違い、祐巳さまはパツと見は普通の生徒に見える。

自分が特別ではなく普通の生徒であると自覚している人にとって、ああいう人になれるといいなという存在だった。美香も自分が普通で平凡な一生徒に過ぎないと強く自覚している一人である。

高等部に進んでいつから祐巳さまのことをそう感じていたかは思いつかない。いつの間にか紅薔薇のつぼみを気にかけるようになっていた。それから事あるごとに観察するようになり、分かったことがあった。

最も近づけそうな存在でありながら、やはり他の普通の生徒にはないものをお持ちだと。山百合会の幹部の方々が夜空に輝く星ならば、祐巳さまは晴天の空にきらめくお日さまだ。

美香はバレンタインデーに祐巳さまにチョココレートを渡したいと思っていた。

どんなチョココレートを作ろうかと悩むことは決して苦ではない。どんなラッピングをしようかと悩むことも同様だ。こうしたことを思い悩む時間は、幸せの成分からできているから。

でも、美香に違う悩みができてしまった。

休み時間、クラスメイトたちが白薔薇のつぼみである乃梨子さんをお願いしているのを聞いてしまった。席が近かったから、聞こえてしまったのだ。

考えてみれば、もっとも大切なことである。どうやってチョココレートを渡すのか想定していなかったなんて。

紅薔薇さまがチョココレートをお断りしているという話も初耳だった。慌ててクラスメイトにそれとなく尋ねて確認したくらいだ。紅薔薇さまを敬愛なさっている祐巳さまが紅薔薇さまのようにチョコ

レートをお受け取りにならないという可能性も捨て切れない。それに受け取ってくださるとしても、いつどこで渡せばいいのだろう。いつも眺めているだけだった美香が祐巳さまに話し掛けるなんてできるだろうか。

幸せの成分は吹き飛んで、憂鬱な悩みだけが残っているように感じた。ずっしりと重いため息について、どこかに解決の糸口がないかと頭の中の隅々を探し始めた。

3

バレンタインイベントの準備で薔薇の館に向かうのはほぼ日課となっていた。妹オーディションの時以来のことである。

日出実是一年生の新聞部部員である。お姉さまが『リリアンかわら版』の編集長であることもあって、他の部員よりも薔薇の館で過ごすことが多い。薔薇の館のメンバーで一年生は乃梨子さん一人だけなので、二人でちょっとした雑談をする機会がたびたびあった。

姉の真美さまは紅薔薇さまのつぼみ、黄薔薇さまのつぼみお二人とクラスメイトで普段から交流も多い。先代の編集長の三奈子さまのころは新聞部は山百合会と緊張関係にあったと聞くが、今はいい関係を築けている。どちらがいいかは分からないが、乃梨子さんと親しくすることは悪いこととは思わない。

（そんな打算ばかりじゃないけれど）

日出実は乃梨子さんと二人で、ちょっとしたお使いに行くところだった。

「そつえば」

日出実は乃梨子さんに話し掛けた。

「乃梨子さんは白薔薇さまにチョコレート渡すよね？」

それから慌ててつけ加えた。

「取材じゃなくて雑談ね」

この質問に乃梨子さんはちょっと複雑な表情を浮かべた。何かあ

るのだろうか。

「うん。渡す予定」

「何かあった？」

「あー、別にたいしたことじゃないんだけど……」

そう言ったものの言葉が続かない。まだまだ信頼関係の構築には時間が掛かるということか。

「クラスメイトから、祐巳さまがチョコレートを受け取ってくださいるか聞いて欲しいって頼まれてね」

お使いの帰り道に唐突に乃梨子さんが言った。さっきの続きなんだろう。

「それって、乃梨子さんに頼むのって筋違いなんじゃ」

日出実はあると思ったまを口にした。

「うん。だから断った」

そう断言したのに、すっきりした表情とはほど遠い。何か思うところがあるのだろう。

「私は……どうしようかな」

「えっ！ 渡さないの？」

乃梨子さんが立ち止まって驚いてくれたことに驚いた。なんとなく言ったことなのに。

「うちは普通の姉妹というより、編集長とその部下って感じだしね」
周りもそう見ているだろう。自他共に認めるってやつだ。

「でも、渡したいんでしょ？」

乃梨子さんがずばりと聞いてくる。そう聞かれれば答えないわけにはいかない。

「うん、まあそうだけれど」

「だったら決まりじゃないかな」

ちょうど薔薇の館に着いた。扉を開けて中に入る前に、日出実は照れながらありがとうと言った。

放課後、一年桃組の教室の前までやって来た。いるかなと中をそつと覗くと、お目当ての人物はまだ教室に残っていた。

「千保さん」

クラスメイトと談笑している千保さんに呼びかける。彼女はそのクラスメイトに何か言ってから入り口に立っている美香のもとへと来てくれた。

「珍しい。美香さん、どうかしたの？」

千保さんとは中等部で同じクラスになったことがある。その時は仲が良かった。最近はそんなに会うこともなかったが、相談相手として顔が思い浮かんだのが千保さんだった。

「ごめんね。ちょっと相談したいことがあるんだけど、時間いいかな？」

「待っててね」

千保さんはそう言うところまで戻っていった。よく見るとそのクラスメイトも千保さんと感じが似ている気がした。鞆を持って現れた千保さんは、入り口でクラスメイトに手を振り、それから美香に向き直った。

「どこ行く？」

向かった先はミルクホール。放課後も少し時間が経ったのでがらがらだった。相談料代わりのコーヒー牛乳を千保さんに渡した。

「ありがとう」

につこり笑って受け取ってくれた。

二人は空いている椅子に腰を下ろし、向かい合って座った。美香は自分の分のコーヒー牛乳を一口飲んでから聞いてみた。

「千保さんは、白薔薇さまにチョコレート渡す？」

千保さんが白薔薇さまファンであることはよく知っている。だから当然その返事は決まっていると思っていた。ところが。

「チョコレート？ うーん、考えてなかったから……」

「えっ！」

驚いた。牛乳パックから中身をこぼしそうになるくらいだった。

「バレンタインデーって、イベントがあるから」

もちろん新聞部と山百合会主催のイベントのことは知っている。

『リリアンかわら版』では号外まで出して大々的に宣伝しているし、カードを見つけたら半日デート券がもらえるとあって、教室でその話題を聞かない日はないくらい盛り上がっている。特に中等部からの進学組は去年参加できなかったイベントへの期待が大きい。

「でも、イベントがあるからって、チョコレートを渡すこととは関係ないんじゃない？」

素朴な疑問をぶつけてみた。

「イベントのことだけで頭がいっぱいで、チョコレートのことまで考える余裕がないっていうか……」

「なるほど」

なんとなく分かった。美香にとってはチョコレートを渡すことがその日のメインイベントだけれど、千保さんにとってはイベントで宝探しをすることがメインイベントなんだって。確かに、バレンタインデーの思い出作りとしてはどちらも記憶に残るものになりそうだ。

「美香さんは祐巳さまに渡すの？」

当然の質問である。美香が祐巳さまのファンであることは千保さんの知るところなのだから。

「……迷ってる。それを相談しに来たの」

「なるほどね」

千保さんが頷いた。

「渡したいなら、渡しちゃえばいいじゃん」

気楽に言ってくれる。それが千保さんらしさだ。

「直接渡せないなら……、そうだ、靴箱の中に入れておくとか！」
紅薔薇さまは靴箱の中に入れてあったものまで返したらしい。祐巳さまがそこまでするとは思わないけれども。

ちよっと思いついたことがあったので聞いてみた。

「千保さんは、白薔薇のつぼみに遠慮して渡さないの？」

「全然そんなんじゃないって。私はただのミーハーだし。本当にチョコレートまで気が回らなかったただけだって」

そついうものなのか。

「美香さんって、もしかして妹の座、狙ってる？」

慌てて首を横に振った。

「まさか。……私も、そんなんじゃない」

ちよっと焦った。なぜ焦ったのか自分でも分からないが。

千保さんはそれ以上追求しないでくれた。

5

「笙子さんは薦子さまにチョコレート渡すよね？」

日出実はりサーチと称してこのところ一年生の知り合いに聞き回っている。記事にするためではない。3学期は記事のネタが豊富でこんなりサーチ結果を載せる隙間もないくらいだ。

むしろ、趣味と実益。

いろんな人から話を聞いて回るのは楽しみだった。だから新聞部に入部したとも言える。一方で、自分がお姉さまにチョコレートはどう渡すかというなかなかイメージしにくいことの参考にもなりそうだった。

笙子さんは考え込んでいる。見た目はふわふわしたかんじのかわいらしい女の子だが、内面はかなりしつかりしている。写真部のエースと自称される薦子さまとは姉妹の関係ではないが、いつも一緒にいるので当然渡すものだと思っていた。

日出実の姉の真美さまと薦子さまはクラスメイトであり、新聞部

と写真部ということもあつて一緒に行動されることも少なくない。
笙子さんと知り合ったのは秋以降だが、話す機会はその後けっこうあつた。

「チヨコレートとは限らないかな」

いたずらっぽく微笑んで答えた笙子さん。何か計画を思いついたようだ。

リサーチ結果を報告する相手に選んだのは乃梨子さんだった。本当はお姉さまにと思ったが、もともとそのお姉さまにチヨコレートを渡すためのリサーチなのだから適切ではない。イベントも直前になり、慌しい作業に追われているさなかだが、ちよっと一服というところで話すことにした。乃梨子さんにはいい迷惑かもしれないが「お姉さまがいる一年生はもちろんお姉さまに、お姉さまがいない生徒は憧れの先輩や山百合会幹部が対象みたい」

乃梨子さんは黙って聞いてくれる。

「でも、今年は大きな異変が起きているの」
「異変って？」

「去年までの統計があるわけじゃないから実際はどれくらいかわからないけれど、チヨコレートを渡さない一年生が増えているみたい」
残念ながら乃梨子さんを驚かせるほどの内容ではなかったようだ。
「理由は、バレンタインイベントのせい。」

チヨコレートを渡さなくても、特別なイベントがあるからそれで満足ってことみたい。特に中等部からの進学組は去年参加できなかったから余計にそういう気持ちがあるかもね」

「中にはフライングで参加した人もいるみたいだね」

笑って乃梨子さんが言った。笙子さんや瞳子さんがそうだったらいい。

「あと、次期薔薇さまがイベントのせいで忙しいことも理由みたい」
これはちよっと注意すべきことなのかもしれない。

「黄薔薇さまは受験生だし、当日も受験があるので直接渡せないから、剣道部を中心に有志が取りまとめて由乃さまに渡してもらいたいね」

大掛かりなことだが、昨年も多くの子ヨコレートを渡されたらしい。半分くらいはホワイトデーのお返しに期待してらしいけれど。でも、今年は受験生だからお返しは期待しないでつて取りまとめ役が言っているからどれくらい集まるかは分からない。

「紅薔薇さまは、去年も祐巳さま以外からの子ヨコレートはお断りになったそうだから、今年もでしょうね。さすがにチャレンジャーもいなさそう」

ここまで噂が広まっていれば当然だろう。

「次期薔薇さま方へ渡したいって一年生はけっこういるけれども、みんなどう渡すか頭を悩ませているみたい」

当日は朝から打ち合わせが予定されている。昼休みもおそらく薔薇の館に籠もり切りになりそうだし、放課後はイベントだ。渡すとしたらその後くらいかもしれない。

「黄薔薇さまのところにように妹が関わるってのも変だよね。あそこはまあ特別だし」

「確かに、志摩子さま宛ての子ヨコレートを渡されても困るかも」
白薔薇さまが子ヨコレートをもらっても平気そうな感じの乃梨子さんでも困るのか。イベントのせいで子ヨコレートを渡せなかったと言われるのも嫌だけれど、かといっていい解決法も思いつかない。日出実にとってはそう深刻な問題ではなかったから、そこでこの話題は打ち切ってしまった。イベントまであとわずか。のんびりとはかりしてはいられないから。

子ヨコレートは完成した。徹夜まではしなかったが、遅くまでかかったのでまだ眠い。自信作とまでは言わないが、それなりに手ご

たえがある出来だ。当然紅い包装紙で包み、リボンを掛けてあとは渡すだけ。

美香の悩みは解決しなかったが、さすがにバレンタイン直前となるとそれどころではなくなった。悩みが解決してもチョコレートができてなければ話にならない。ようやく準備が整って、再び悩みのことを思い出したところだった。

それでもまずは行動あるのみ。いつもより早く家を出て学校へ向かう。それなのに、リリアン女学園はいつもの朝とは明らかに違っていた。

当然といえば当然。特別な日なのだから。

マリア様の前もすでに混雑していた。これだとチョコレートの受け渡しに来ているカップルも渡すタイミングがなかなかなさそうだ。美香はこの賑わいを見て、もう少し早く登校すればよかったと悔やんだ。

いつものように上履きに替える。いつもは教室に直行だが今日は二年生のところへ向かう。千保さんに言われたように靴箱の中にチョコレートを入れることを考えていたからだ。

人の流れが途切れた時を見計らって、祐巳さまの靴箱を開けてみた。入っていたのは下履きの革靴だった。

(……残念)

祐巳さまは既に登校しているわけだ。今チョコレートを入れておけば、遅くとも帰るときには見つけてもらえる。でも、何時間も靴箱の中にチョコレートを入れておくのは躊躇われた。またしても、もう少し早く来ればよかったと悔やんだ。

このまま自分の教室に向かう気になれず、勇気を出して二年生の教室の方へと向かった。気持ちが盛り上がっている今ならチョコレートを渡せるかもしれない。

二年松組の教室の前の廊下は多くの生徒が行き交っていた。一年生とおぼしき生徒たちもかなりいた。そのすべてがツボみ目当てで

はないだろうが、当然中には祐巳さまや由乃さまにチョコレートを渡す目的の人がいると思われた。

美香は二年松組の教室の中を覗きたかったが、人が多くて思うようにならない。かといって取り次いでもらうほどの勇氣は微塵もなかった。どうしようかと思っていると、一年生たちの会話が耳に飛び込んできた。

「つばみの方々はいらっしやらないの？」

「もう薔薇の館へ向かわれたらしいわ」

「えー、ざんねーん」

「お忙しいそうよ。イベントの打ち合わせがあるって話だし」

美香も心の中で、ざんねーんつつばやいた。イベント当日なのだからお忙しさに決まっていたのに大ぼけだ。やはりもっと早く来ればよかったのだ。

自分の教室にとぼとぼと向かう。どうしよう。この様子だと休み時間もお渡できるかどうか。チョコレートの香りが充満している自分の教室に入るなり、美香はがっくりと肩を落とした。

休み時間のたびに二年松組の教室の前までは行ってみた。同じような目的と思しき一年生の姿も見た。でも、誰も取り次いで呼び出してもらうほどの勇氣はなかったようだ。これだけの人の目の前でチョコレートを渡す勇氣はなかなか持てるものではない。

昼休みはすでに薔薇の館に向かわれた後だった。薔薇の館のそばまで行ったものの、祐巳さまが出ていらっしやるわけもなく、チョコレートを渡せぬまま放課後になってしまった。

楽しいはずの特別な一日は、悶々とする時間ばかりとなってしまうった。

何をしているんだろう。

そんな思いも湧き上がってくる。それでも、掃除を終えると急いで薔薇の館の前の中庭へと向かう。千保さんとは違い、美香はイベ

ントにそれほど強い関心を持っていなかった。万が一美香がカードを見つけてしまっても、いったいデートで何を話していいか見当も付かない。でも、参加しないという選択肢は始めからなかった。祐巳さまを間近で見るチャンスだし。

こんなに参加するのかとあたりを見て思ってしまった。姉のいない一年生だけが参加とはもちろん考えていなかったが、上級生も多いし、なにより姉のいる一年生も大勢いるみたいだった。

ほとんどの人はゲーム感覚なんだろう。みんな楽しそうに始まるのを待っている。美香は自分が場違いなところにいるような感覚さえ持ってしまった。

この中で半日デート券をゲットできるのは多くても三人だけ。そう思うと、自分がその三人に入る気がまったくしなかった。こんなことを考えている時点で負けたようなものだ。

深くため息をついて、周囲を観察してみる。主役の次期薔薇さま方はまだ見当たらない。当然見知った顔もちらほらと見かける。そんな中に意外な人物を発見した。

表情までは見えないがクラスメイトの瞳子さんが参加していた。あの縦ロールは人混みの中でもしっかりと目立つ。そんなに仲が良かったわけではないが、長いリリアンでの生活の中で何度か同じクラスになったことがあった。しかし、高等部でのおよそ一年間で彼女に対する印象は大きく変わった。

祐巳さまとの関係でさまざまな噂があった。梅雨時のミルクホール事件。学園祭では山百合会の劇に参加していた。そして、衝撃の生徒会選挙への立候補。美香には瞳子さんが何を考えているのかまったく分からなかった。一時は祐巳さまの妹候補ナンバーワンと言われ、美香は羨ましく思ったものだ。最近はクラスメイトともほとんど会話しなくなった。乃梨子さんくらいだろう、親しくしているのは。

瞳子さんは楽しそうには見えなかった。むしろこの場から立ち去

りたいようにさえ見えた。この場にそぐわないという意味では、美香とよく似ているように感じた。

司会者は拡声器でイベントの詳細を説明している。それを聞き流しながら美香の目は祐巳さまに釘付けだった。いつもと変わらぬ輝きを感じていた。美香は祐巳さまを見ているだけで幸せだった。

スタートの宣言から参加者が一斉に動き始めた。一目散に目的地へ向かう人。グループで行き先を話し合っている人。どこへ行くか決めかねてまだこの場に留まっている人。

ちらっと見えたが千保さんは合図と同時にどこかへ走り去った。楽しくてしょうがないという風に見えた。美香はもちろん宛てなどなかった。ぼんやりと立っていた。周囲の喧騒に取り残された感じだった。

ふと薔薇の館を見ると、祐巳さまが入り口のところでじっと何かを見ていた。その視線の先を追うと紅薔薇さまがいらっしやった。ちょうどハンデキャップの5分間を終えゲームに参加されるところだった。

紅薔薇さまは一年生を数人引き連れて薔薇の館に向かわれた。美香もその後を追った。

今なら薔薇の館に入ることができる。

昨年の秋に茶話会が開催された。姉妹の出会いの場を設けるといふ趣旨だったが、紅薔薇のつばみと黄薔薇のつばみが参加されるということで、両つばみの妹選びの場だというのがもつぱらの噂だった。

美香も参加条件には当てはまっていた。薔薇の館の前まで行ったこともあった。その時は薔薇の館の扉が開かれていて、一階に受付が置かれていた。でも、中に入って参加用紙をもらうことはなかった。

薔薇の館という場所に臆してしまったことが理由の半分。残り半分は、参加する勇気がなかったから。どうしても姉が欲しいと思っていなかったし、たとえ祐巳さまとお話する機会があっても何を話していいか分からなかった。

他の一年生たちの後に続いて薔薇の館に足を踏み入れた。中は決して広くはなかったが、美香にとつて禁忌の場所だったのでドキドキしてしまった。学校内の他の施設とは異なる雰囲気漂っているように思えた。

遅れないように二階へと上がる。ギシギシと階段が音を立てた。今はまだ多くはないけれど、参加者の多くが上がったら床が抜けたりしないかなと心配してしまった。

ビスケツトのような扉の先に、今日の主役の皆さまが勢揃いしていた。部屋に入るなんて畏れ多いと思ったが、いまさら引き返すわけにもいかないだろう。本当は紅薔薇のつぼみのそばに座りたかったが、他の一年生にくつついて席を選んだ。

乃梨子さんから紅茶を振舞われた。学校ではない別世界にいるような気分になった。他の一年生たちが紅薔薇さまや祐巳さまに話しかけ、それに答えてくださるのを見ただけで美香は十分だった。いつの間にかチョコレートのはずかり忘れてしまっていた。

薔薇の館は目まぐるしい舞台劇が行われているようだ。黄薔薇さまの登場や由乃さまのカードの発見に心躍らされた。矢継ぎ早に様々な出来事が起きて、ゆっくり考えるゆとりなどなくなってしまった。

その上、何度か席を替わるうちに、祐巳さまの近くに座ることができた。今までこんなに近付いたことはなかった。ドキドキと高く波打つ心臓の鼓動まで聞かれてしまうのではと思うほどだった。目くるめく時間はあっという間に過ぎてしまう。紅薔薇さまが残り5分になってからカードを見つけると仰られ、残り時間がもうわずかということに気づかされた。気高く自信に満ちた紅薔薇さまが

カードを見つける。この舞台劇のラストを飾るのにこれほど相応しい幕切れはないと思った。この近くに紅いカードが隠されているとしても、美香は自分で見つけようとは思わなかった。

紅薔薇さまと祐巳さま、このお二人の絆の強さがうかがわれるやりとりを聞いているだけで美香は幸せだったから。

思い返せば新入生歓迎会でも間近で見ることができた。何が起きたかよく分からなかったが、白薔薇さまや乃梨子さんのやり取りに無性にドキドキした。美香にとって山百合会は観覧するものだった。自分が一緒に舞台に立とうとは思わない。

クライマックスという場面で更なる展開が用意されていた。もちろん誰かがシナリオを書いたわけでもないだろう。しかし、この大どんでん返しはマリア様の御心なのかもしれない、と後に思うようになった。

扉が開く大きな音に驚き、小さな身体で大きな音を立てて歩く姿に驚き、今まで見たことのない瞳子さんの表情に驚いた。鬼気迫るなんてもんじゃない。普段何かしら演じているような雰囲気を漂わす瞳子さんが、すべてをさらけ出しているように見えた。

周囲の驚きも一切気にせず、ただ祐巳さまを見て言った。

「私を、祐巳さまの妹にしていただけませんか」

美香は頭の中が真っ白になった。

薔薇の館でのことは夢だったのかと思ってしまっほど、なにか現実離れしていた。

どれだけ時間が経ったかよく分からなかったが、いつの間にか中庭で結果発表をぼんやりと見ていた。紅薔薇さまのカードの発見者が瞳子さんと紹介されて、夢ではなく現実だったと思った。

しばらくはこの噂で持ちきりになりそうだ。その現場を特等席で見っていたわけだ。でも、今日の出来事を他人に話したいとは思わない。宝石のような時間を含めて、胸の奥にしっかりとしまっておき

たかった。

少し気分が落ち着くと、今度はいろんなことが頭を渦巻くようになった。カードは本当に瞳子さんのものでよかったのだろうかとか、これで祐巳さまは瞳子さんを妹にしまうのだろうかとか、私は見ているだけで本当に良かったのだろうかとか。

イベントはつつがなく幕を閉じ、次期薔薇さま方がチョコレートを配っているのが見えた。美香は列が途切れるまで待つて、今日ずつと話し掛けられなかった祐巳さまにいくつかの質問を試してみた。祐巳さまは美香の質問にちゃんと答えてくれた。それが嬉しかった。ペコリと頭を下げて走り去る。もうチョコレートを渡す気はなくなっていた。

その夜。

美香は自分の部屋で一人チョコレートを食べた。祐巳さまの好みに合わせて思いっきり甘く作ったはずなのに、ちょっとビターな味だった。

（後書き）

祐巳がバレンタインで一年生からわずか2個しかチョコレートをもたらわなかったことが不満でした。それへの私なりの解釈といったところでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3281f/>

ビター・チョコレート 一年生たちのバレンタイン

2010年10月8日15時16分発行